

英語を使える児童の育成 ～外国語専科教員の専門性を生かした指導の実践～

登別市立幌別小学校 学級数 13 (校長 柴田 政人)

I 実践テーマの趣旨

本校では、「学校力向上に関する総合実践事業」の取組により、令和2年度から第5・6学年の外国語科の授業を、令和4年度からは第4学年の外国語活動の授業を外国語専科教員が担当し、外国語教育の充実に資する実践を重ねてきた。中学校の専科教員の専門性と経験を生かした授業を通して、本校を含め市内3小学校の児童の英語の運用能力と学習への意欲を着実に向上させている。

II 実践の概要

1 音声を中心とした英語で考えるトレーニングの充実

(1) 児童が分かる適切な量の「英語のシャワー」(インプット)

本校では、児童が専科教員やALTとの英語でのやり取りに積極的に取り組むことができるよう、「英語のシャワー」に浴びる活動を大事にしている。英語のインプットを行う際、児童が理解できるよう、分かりやすい言葉を用いたり、言い換えたり、ジェスチャーを多く取り入れたりすることが大切である。高い英語力を有する専科教員の指導により、児童の英語に対する不安を取り除き、失敗を恐れない雰囲気づくりを行いながら、小学校の外国語教育の特性を踏まえた質の高い授業を実施している。

(2) テンポよく「話す」活動(アウトプット)

児童が、英語のリズムに慣れたり、緊張せず気持ちよく英語を話したりすることができるよう、リズムBOXのアプリを活用している。リズムBOXを活用することにより、ドラムのビートにのせて英語を話すことができ、声を出すことが心地よいと思える雰囲気づくりにつながっている。

2 英語を使う「必然性」と「相手意識」をもたせた言語活動の充実

(1) ニュージーランドの小学校とのオンライン交流

令和3年度からニュージーランドの小学校とオンラインによる交流を行っている。1年目はグループでの自己紹介や互いのふるさと紹介を行った。2年目はブレイクアウトルームを活用した個別に交流する活動を行っている。円滑な交流授業に向け、専科教員は事前の打合せを英語で行っている。



【ニュージーランドの小学校とのオンライン交流の様子】

(2) 同じ中学校区の小学校との交流

専科教員が市内の3小学校で指導していることを生かし、同じ中学校区の学級同士で英語による交流を行っている。

	5年生	6年生
幌別小学校	幌別中学校区交流	Sancta Maria 小学校との交流 ・自己紹介：ビデオ交流 ・文化交流：ZOOMオンライン
幌別東小学校	「自己紹介」 「推しメン・ヒーロー」 紹介 ビデオ交流	ALTの家族への「日本紹介」 ビデオ交流
幌別西小学校	沖縄 ゆたか小学校との交流 「自己紹介」 「推しメン・ヒーロー」紹介	ALTが入っていないので 交流なし

【各校での交流先とその内容】

3 児童の異文化への興味を引き出す工夫

(1) 異文化の感じられる外国語ルーム

世界の国旗や写真等の掲示や英語の絵本の設置、外国のBGMが流れる「外国語ルーム」をつくった。

(2) 「世界ふれあい街歩き！」と称した活動

授業開始前に外国の写真の解説などを行っている。

(3) ALTとの絵本の読み聞かせ

低学年の朝読書の時間帯の活用して行っている。



【外国語ルームの様子】

4 「学びの実感」をもたせる取組

○ 1人1台端末を活用した言語活動の撮影と振り返り

児童が、自身の英語による表現力の向上が実感できるよう、端末で撮影した発表動画を見返す活動を取り入れることで、自分たちが英語以外の外国で同じことを表現できるかを児童に考えさせることを大事にしている。また、端末を家庭に持ち帰った際に家族に発表動画を見る機会を設定し、児童が学びの実感や意欲をもてるようにしている。



【読み聞かせの様子】

III 成果(○)と課題(●)

○ 専科教員の専門性に基づいた英語の授業を通して児童が英語を使える実感をもてたことにより、指導している3小学校全ての児童の英語学習に対する意欲や授業への満足度が向上した。

● 学級担任の外国語科の指導力向上に向け、専科教員の指導方法等を学校内外で共用する研修等を市内で実施する必要がある。

専門性を生かした教科担任制の指導について

浦河町立堺町小学校 学級数 14 (校長 品田 和輝)

I 実践の趣旨

本校は、「学校力向上に関する総合実践事業」の中核校として、令和3年度から理科の専科加配教員が配置されている。専科加配教員は、浦河町立堺町小学校及び浦河町立浦河小学校で第5、6学年の指導を行い、浦河町立浦河第一中学校で第1学年の指導をT2として行い、3校を巡回し理科の授業改善を推進している。専科加配教員は、中学校での指導経験があり、理科の専門性を生かし、小・中学校9年間を見通した教育活動の充実を図るため、質の高い授業の提供を目指して取り組んでいる。

II 実践の概要

1 理科専科の実践

- (1) 専科加配教員による全国学力・学習状況調査結果の分析と共有

「全国学力・学習状況調査」を分析した結果、理科の課題として「自分の考えをもち、その内容を記述すること」が明らかになり、「理科巡回通信」を発行し、3校で課題を共有するとともに、町内全ての学校へ情報提供を行い、授業改善を図っている。

- (2) ICT機器を効果的に活用した授業改善

理科において、児童生徒が自分の考えを記述する指導を充実させるため、実験の考察の場面に重点を置いた。実験の考察の場面では、iPadで考えを打ち込み、それを友だちと共有し、考察の内容のよさを見付け、より妥当な結論を導くなど、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を通して、主体的・対話的な学びにつなげている。

- (3) 外部講師による視察をもとにした授業改善

北海道教育大学准教授山中謙司氏を校内研修の講師として招聘し、「教科の本質を踏まえた授業改善」について講話をしていただき、その内容を踏まえた授業改善を進めている。

2 学級担任の業務軽減

- (1) 授業準備の時間確保

今まで学級担任が行っていた理科の授業における実験の準備、後片付けの他、校外活動に関する実地調査及び外部講師との打合せを専科加配教員が担当することで、学級担任は担当する教科の教材研究をする時間や、生徒指導等の対応に係る時間を確保することができた。

- (2) 働き方改革の推進

理科の指導を教科担任制にしたことで、授業時数の多い高学年の学級担任が職員室で学級事務等の仕事をする時間を確保することができ、働き方改革の推進につながっている。

III 成果(○)と課題(●)

- 専科加配教員が全国学力・学習状況調査の結果を分析し課題を明確にした小学校の理科の授業を行うことにより、観察、実験の結果を基に自分の考えを書くことができるようになり、「ほっかいどうチャレンジテスト」の全道平均との差が縮まったり、上回ったりするなど、授業改善の成果が現れた。

- 高学年の理科を教科担任制にしたことで、学級担任の教材研究や児童と関わる時間が増えた。

- 専科加配教員が中学校の授業を担当する機会が少なく、系統性を踏まえた指導に至っていないことから、中学校との連携を密にするとともに、中学校の教員が小学校に乗り入れる体制の構築や義務教育9年間を見通した理科の指導計画を作成する必要がある。

理科巡回通信

発行号：第1号
発行日：2022年8月8日
文責：浦河町立堺町小学校
理科巡回教諭 安達 正敏

本年度より理科巡回教諭となりました安達と申します。教員3年目にして皆さんにお伝えできることは少ないのですが、自身の実践の他、先生方と相談したことや研修で学んだことともに、情報をお届けできればと思います。

全国学力学習状況調査から **理科における「書く」指導について**

書くのが難しい…子どもも先生方も苦心されていることだと思います。今年度の全国学力・学習状況調査の理科でも浦小、堺小ともに「結果を見てわかることを書くこと」について課題がありました。例えば、図1の問題では結果を使って考察のわけを書くことが求められます。しかし、児童の解答には「一番あついたら」などの不十分なものの他、無回答の児童が多い実態がありました。

学年	24℃	28℃	32℃
4年	24℃	27℃	29℃
5年	24℃	27℃	30℃
6年	24℃	29℃	29℃

理科の「書く」には2つの難しさがあります。1つは「実験結果とは別に自身の経験も入りこんでくること」、もう1つは「説明が長くなること」です。児童は情報も実際の文章も多くなることで、関係のないことまで書きすぎたり何から書いてよいかわからなくなったりしてしまっています。

【R4チャレンジテスト結果推移】

【専科加配教員が発行している通信】



【山中准教授による研修の様子】

	前年度問題	1学期末問題
4年	-0.45	0.05
5年	-0.5	-0.2
6年	-0.1	-0.15

【R4チャレンジテスト結果推移】

退職教員等外部人材活用事業による学校力強化と組織の活性化

江差町立南が丘小学校 学級数9 (校長 吉岡 栄)

I はじめに

本校には、初任段階教員2年次、4年次の教員が2名、期限付きの若手教員が2名おり、若手教員の指導力の向上が喫緊の課題となっている。

そこで、昨年度、本校で退職を迎えた教員が、退職人材活用事業により時間講師として、若手教員の実践的指導力の向上及び児童の学力向上・生徒指導の充実を図っている。

II 実践の概要

1 専門性を生かした教科担任制による若手教員の指導力向上

本校では、退職教員の専門性を生かすため、当該教員を高学年の理科の教科担任として配置している。また、授業においては、若手教員がT2として指導できる体制を構築し、児童の意欲を引き出す楽しい授業づくりや日常実践に生かす指導技術などを学ぶ機会を設けている。

退職教員との事前の打合せや、協働での教材研究等を日常的に行うことにより、若手教員が、授業づくりのポイントを習得するなど実践的指導力が高まりつつある。

【初任段階教員の声】

- ・体験活動を充実させ、児童が納得できるように指導を工夫していることが、大変参考になりました。
- ・1枚の模造紙に実験結果をまとめ、色を分けて記述することで容易に比較できるようにしている点をすぐに取り入れてみようと思いました。



【T2として参加し、指導技術を学ぶ若手教員】

2 習熟度別指導による学力向上

全国学力・学習状況調査やCRTの結果分析により明らかとなった本校の課題を解決するため、算数科において、定着に課題が見られる子どもに対するきめ細かな指導を充実させる必要がある。

そのため、習熟度別少人数指導を行う体制を整備し、「誰一人取り残さない学力の向上」を目指している。

また、退職教員と学級担任が、個々の児童の学習や生活の状況を交流するなどして、深い児童理解に基づき、落ち着いて学習できる環境整備を図りながら、確かな学力の育成に努めている。

3 生徒指導上の諸課題への対応

児童一人一人の指導の状況などをデータ化し、次の学級担任へと確実に引き継いでいるが、生徒指導に係る事案が多様化・複雑化しており、十分な引継ぎができないことも増えた。

そこで、退職教員が学級担任等の「相談窓口」となり、特別な配慮を要する児童や保護者に寄り添うことの大切さ、家庭訪問や電話連絡の仕方等について助言している。

特に、不登校児童への支援については、家庭と学校を結ぶ橋渡し役として、親和的な関係の構築に努めている。

4 経験豊富な教員による学校力の強化と組織の活性化

若手教員が抱える悩み等に寄り添い、解決の糸口を共に考え、アドバイスするなど、人材育成の視点からの取組により、教員育成指標における子ども理解力や地域等との連携・協働力などのキーとなる資質能力の向上が図られ、学校力の強化や組織の活性化につながっている。

III 実践の成果と課題

- 経験に裏打ちされた技能と専門性に基づく「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業の実践により退職人材教員が、授業づくりコーディネーターとしての役割を果たし、教員の授業力が高まった。
- より一層、個々の子ども理解や指導方法の充実を図るため、本校の教員が、退職人材教員と共に学ぶ姿勢を大切にし、日々の授業改善に努める必要がある。

体育専科教員を活用した体力向上の取組

旭川市立旭川小学校 学級数 19 (校長 佐藤 栄一)

I 実践テーマの趣旨

本校は、令和2年度から体育専科教員が中心となり、体育授業と授業以外での体力向上に向けた取組の充実を図っている。特に、児童アンケートや新体力テストの結果を活用した授業改善に取り組み、体力向上における成果と課題を全教職員で共有し、組織的に継続した取組を推進している。

II 実践の概要

1 児童の資質・能力の育成に向けた協働的な課題解決場面の設定

(1) 体育授業に関する意識調査

体育アンケートを全校児童に実施し、項目ごとに前・後期で比較し授業改善を行っている。児童が達成感を感じている場面を把握することで、運動の楽しさを追究する授業を構成した。本校では、仲間と一緒に活動することに運動の楽しさを感じている児童が増加傾向であることから、仲間と課題等を考える、動きを確認しアドバイスするなど、関わりを大切に協働的な場面を意図的に設定した。また、ICTを活用し、動きを可視化し共有することで、更なる意欲や技能の向上につながった。

(2) 学習過程の統一

児童が見通しをもち、協働して活動することができるよう、単元を通した問題解決的な学習を全校で統一した。次の活動が明確になることで、運動を苦手としている児童が安心感をもつことができた。さらに、交流場面の設定により、技能の習得に対する不安感を軽減することにつながった。また、運動量を確保することで、自己変容を実感させ、挑戦心や自己肯定感の育成につながった。

【1 単位時間の学習の流れ】

- ① ウォームアップタイム
- ② ねらいの確認
- ③ 活動1 (個人/基本運動)
- ④ 活動2 (複数/発展運動)
- ⑤ 振り返り

2 新体力テストを活用した授業実践の取組

(1) 体づくり運動での取組

高学年では、個別の結果を踏まえ、「体の柔らかさ・巧みな動き・力強い動き・動きを継続させる能力」などの動きについて自己課題を設定させ、解決に向けて活動できる時間を確保した。目標回数やタイムを設定したり、ペアで活動したりすることで、主体的に活動する姿が多く見られた。

(2) ウォームアップタイム (準備運動) での取組

新体力テストの結果から、学校・学年の実態を明らかにし、特に課題となる動きについて、計画的にウォームアップタイムで取り入れた。目的意識をもって活動することで、基本的な動きの質の向上や各運動領域での技能の向上につながった。

3 日常的な運動機会の確保

(1) 養護教諭との連携

保健室前の廊下に5~50kgのハンドグリップや握力計、握力について解説したポスターを展示した「握力コーナー」を設置している。保健室前を通る際にハンドグリップ等を手に取り、力一杯握る児童の姿が多く見られた。これをきっかけとして、自己の体や運動能力に興味・関心をもつ児童が見られた。

(2) ダンス大会の実施

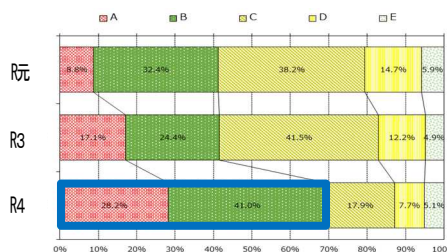
北海道教育庁学校教育局健康・体育課が制作した「キタキツネダンス」を題材に、全校でダンス大会を開催した。夏季休業前の体力づくりの一環としてダンスの練習を位置付け、クラスごとに練習の成果を発表した。

III 実践の成果 (○) と課題 (●)

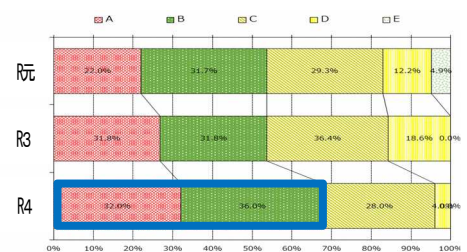
○ 体育専科教員による専門性を生かした授業づくりをもとに、指導方法や内容について、体育専科教員と学級担任が日常的な意見交換や連携を図ることで、学級担任の指導力の向上につながり、第5学年の過去3年間の体力合計点を比較すると、男女ともに総合評価A・Bの割合が約70%に向上する結果となった。

● 体育専科教員活用事業の終了後も体育授業の更なる充実に向け、継続した取組の必要がある。

● 意図的・計画的なICTの活用場面について、更なる研修を進める必要がある。



【総合評価 (男子)】



【総合評価 (女子)】

2村で外国語専科加配を活用した教科担任制の実践

～教科担任の導入における成果と課題～

中札内村立中札内小学校 学級数14 (校長 牧 伊津子)

I 実践テーマの趣旨

本校では、昨年度から更別村の学校と教科担任制を始めた。専科教員と各学校の担当者が協議する機会を設け、児童の実態、実態に応じた指導の工夫、7年間の系統性を明確にした指導、評価規準の明確化等の指導のポイントを確認し合うとともに、専科教員が担う役割を共有し、効果的な指導につなげた。

II 実践の概要

1 専科教員との協議

教科担任制を実施する前に、以下の取組方法の工夫や指導のポイントなどを共有した。

- (1) 更別村を合わせた2村4校において、各学校の児童の実態を的確に把握するとともに、実態に応じた指導方法等の工夫を行うこと
- (2) 教科の特質を踏まえ、「外国語活動」から小学校「外国語科」、中学校「外国語科」へとつながる7年間の系統性を明確にした指導にあたること
- (3) 4技能5領域における学年毎の評価規準を明確にするとともに、CAN-DO リストを活用し、児童が、「単元を通して身に付けさせる資質・能力」を実感できる授業づくりに取り組むこと
- (4) 授業以外でも日常的に外国語及びその文化に触れる環境をつくること
- (5) 学級担任の授業時数の削減による空き時間の確保を積極的に行うこと

2 専科教員による実践

- (1) 各学校の実態に応じた教材づくりに努め、子どもの興味・関心を高める工夫を行った。年度当初の授業において、児童に「単元を通して身に付ける資質・能力」を伝えるとともに、教科通信で保護者との共有を図った。
- (2) 中学校における全国学力・学習状況調査等の問題と外国語活動及び小学校外国語科の学習内容との関連について分析し、教職員との共通理解を図った。
- (3) 中学校「外国語科」へのつながりを意識して評価規準を見直し、「単元を通して身に付けさせたい資質・能力」を意識した授業を実践した。
- (4) 外国語に関連する掲示物を特別教室等の児童に見える場所に掲示するなどして、異文化に触れる機会をつくった。また、外部機関の検定受検を促す等、外国語に対する興味・関心を高める取組を行った。
- (5) 各学校の児童の実態に応じた指導方法で授業を行うとともに、学級担任との情報共有を心がけて、学級経営方針に基づいた授業づくりに取り組んだ。

英語の授業は、言葉に慣れることがゴールなので、何回まちがってもO.K.です！ はづかしがらずに大きな声で話しましょう！ これから1年間次の計画で授業を行います。	
6年生の外国語学習の流れ、英語でできるように ことを確認します。	これまでに学んだ表現を使って、夏休みの思い出について紹介します。
これまでに学習した自己紹介の表現を思い出し、自分の好きなものについてやり取りします。	行きたい国の紹介を聞いたり、言ったりします。

【教科通信で児童・保護者と「できること」を共有した資料の一部】

	英語表現	発表内容
A	単元の表現の他、伝える目的や場面、状況や相手に応じて、既習事項を組み合わせて表現している。	伝わりやすいように意識して、伝える内容やその順序を考えている。自分の思いや考えを効果的に伝える内容となっている。
B	単元の表現を適切に用いている。	自分の伝えたい内容を伝えることができる。
C	単元の表現を使うのに自信のなさが表れ、間違えも見受けられる。	自分の伝えたいことを伝えるのに苦勞している。

【評価規準を明確にするためのルーブリック（一部抜粋）】

III 成果(○)と課題(●)

- 7年間を見通した指導により、地域の実態に応じて、外国語に「慣れ親しむ」から「初歩的な活用」までの段階に応じた指導を行うことができた。
- 各学年において、単元を通して身に付けさせる資質・能力を明確にしたことにより、4技能5領域のバランスのとれた指導に取り組むことができた。
- 2村4校において、各学校の実態に応じた指導を行うために、ALT等や外部団体との連携を図ることにより、児童の意欲を高める指導に取り組むことができた。
- 各種調査の分析に基づく指導方法や指導内容の検討を重ねたことにより、児童自身が見通しをもって学習に取り組む姿が見られるようになった。
- 学習評価の充実に向けて、評価規準に基づく指導と評価の一体化を図る必要がある。

Nakasatunai English Education
ふるさと中札内村に誇りを持ち、グローバル化時代に

① グローバル化時代に対応した英語によるコミュニケーション能力を養成
② 自分の思いや考えを表現するプレゼンテーション能力の育成

学年末の到達目標	話すこと	
	やり取り	発表
<ul style="list-style-type: none"> 「聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと」による実践的コミュニケーションにおいて英語の知識（音韻や文字、語彙、表現、文法、発音の観点など）を活用できる基礎的な技能を身に付けている。 コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じて身振りで簡単な事柄について、伝えたいことを表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 中学校の思いや考えや中学校生活について、授業の準備や授業中について、伝えたい内容を整理した上で、自分の思いや考えを効果的に伝えることができる。 自分の伝えたい内容を伝えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 中学校の思いや考えや中学校生活について、授業の準備や授業中について、伝えたい内容を整理した上で、自分の思いや考えを効果的に伝えることができる。 自分の伝えたい内容を伝えることができる。

【「慣れる」から「慣れ親しむ」までの見通しをまとめた資料の一部】